

キャラクター名  
芥生蓮人

プレイヤー名

シンドローム	ソラリス ブラム=ストーカー		ワークス	暗殺者	カヴァー	しがない浮浪者
	オプション		年齢	25	性別	♂
覚醒	渴望	衝動	加虐	初期侵食率	35 %	
出自	兄弟	経験	戦いの日々	邂逅	借り：ヨハン	

	基本値	ワークス	ボーナス	成長	他修正	能力値	HP	26
肉体	1	0	1			2	行動値	12
感覚	2	1	1	1		5	(非装備時)	12
精神	2	0	0			2	戦闘移動	17
社会	3	0	1			4	全力移動	34

肉体			感覚			精神			社会		
技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正
白兵	1		射撃	4		RC			交渉		
回避			知覚			意志			調達	1	
運転：大型二輪	2		芸術：			知識：急所	2		情報：裏社会	2	
運転：			芸術：			知識：			情報：UGN	1	
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		

武器・コンボ	能力	命中値	G値	攻撃力	射程	メモ
アサルトライフル	射撃	5r+4	0	9		
断罪の銃弾	射撃	5r+4	0	10		コスト7/ライフル+痛+罪+コソ
断罪の銃弾@100	射撃	8r+4	0	11		コスト7/ライフル+痛Lv2+罪Lv4+コソLv3
		0				

防具	価格	装甲	回避	行動	メモ

所持品	
応急手当セット	

合計装甲： 0    合計回避： 0

ロイス				
対象	感情(pos)	感情(neg)	タイ	消費
対抗種	P	N		
弟	P 懐旧	N 恐怖		
天乃 創一朗	P 信頼	N 不安		
霧谷雄吾	P 尽力	N 食傷		
百目鬼先生	P 連帯感	N 劣等感		
徒花アスカ	P 感服	N 無関心		
昇華)リプロダクター	P 執着	N 嫌悪		

最大財産P: 10    残り財産P: 0

スキル名	SL	コスト	タイミング	射程	対象	判定	制限	メモ
ワーディング	★	-	オート	視界	シーン	自動	-	
効果： 非オーヴァードのエキストラ化								
リザレクト	0	1d10	気絶時	-	自身	自動	↓100	
効果： コスト分のHPで復活								
コンセントレイト：ソラリス	2	2	メジャー	-	-	-	-	
効果： C値を-LV								
甘い芳香	2	4	セットアップ	視界	範囲	自動	-	
効果： ラウンド間、対象の行動値を-[LV×2]								
痛みの水	1	2	メジャー	視界	単体	対決	-	
効果： 攻撃力+LVの射撃。ダメージを与えた時「放心」を与える。								
罪人の枷	3	3	メジャー	武器	単体	対決	-	
効果： 組み合わせた攻撃が命中した場合、そのラウンド間対象の判定の達成値を-[LV×2]								
滅びの一矢	4	2	メジャー	武器	-	対決	-	
効果： 組み合わせた射撃攻撃のダイス+[LV+1]個、HP-2点。								
オーバードーズ	1	4	メ/リ	-	-	-	100↑	
効果： 組み合わせたエフェクトのLVを+2。LV回/シナリオ								
声無き声	1	-	メジャー	視界	シーン	自動	-	
効果： 今俺は、お前の脳裏に直接話し掛けている								
効果：								
効果：								
効果：								
効果：								
効果：								
効果：								
効果：								
効果：								
効果：								
効果：								

「Anger Impulse」用  
UGNに手を貸すようになってから、多分数ヶ月くらい。

あざみ れんと  
パンダナライフル。lie luck 反転した幸運。

なにかを守ろうとしていたことはうすぼんやりと覚えている。  
だがそれは遠い記憶で、重い蓋をした、忘れ去るつもりで過去の過去だ。  
今はただ金を欲していた。何故、何のためか？理由などどうでも良かった。  
自分の行動の結果で何がどう変わろうと、さしたる興味もない。しっぺ返しすら気にも留めていない。

仕事柄、意味の分からないオーヴァードというものに接する機会もあった。  
現実味はなく、ただ漠然と、こいつらと正面から殺り合ったら勝ち目はないのだからということだけ感じていた。  
なら、自分がその力を手にしたらどうだろう。  
自在に毒を操れるようになった頃から、FHの依頼を受けるようになった。  
彼らにしてみれば末端の末端、要員すら割きたくない些細な仕事だったのだから。  
それでも「人間」だった自分からしてみれば、リスクと払いが良い意味で釣り合わず都合の良い仕事だった。  
かき集められた子供たちがひとり消えふたり消え、残った者たち同士で殺し合いをさせ、そして強力なオーヴァードを「造り出している」と知るまでは。  
幾人もの人間を屠ってきた自分が、何を言っているのだろうか。何を言える資格があるのだろうか。  
それでも——古傷が抉られ、疼くことを止められなかった。  
いつしか自在に血を操れるようになり、これが罰なのかと、諦めを持ってFHに手を貸すのを止めた。